

展 望

乳児の社会的相互作用の研究動向

——とくに仲間関係の発達の個人差を中心に——

布 施 佐代子*

I. 問 題

乳児期**——それは、研究者にとって長いこと、「魅力はあっても近寄りがたい」「月の裏側のようなもの」(Bower 1977; 岡本ほか(1980)の訳による)であった。しかし近年、研究技法の進歩に伴い、人間の乳児の有能さを示唆する事象が次々に報告されるようになり、いまや乳児期の発達に関する知見は、国の内外を問わず急速に増加している。その背景には、前言語期において言語獲得への準備がどのようになされていくかということが、最近の発達研究の1つの関心事(古沢1982)となっているという状況や、言語・認知活動の発生的機構の追求という点から、乳児の生育が改めて問題にされるに至った(寺田1983)ことなども考えられる。

このような国の内外における乳児研究前進の具体的現われの1つとして、乳児の社会的相互作用(social interaction)の発達に関する研究の増加がある。

子どもの社会的行動の発達は、従来、母親との関係を中心に研究がすすめられてきた。そこでは、母子間の交渉が生後間もなくあるいはすでに妊娠中から縦断的に追跡され、母子相互作用の発達過程そのものが明らかにされつつある(例: Clarke-Stewart et al, 1980; 川上ほか1980, 1981, 1982; 川上・須田1979; 藤崎ほか1982など)。とくに、発達初期の母子間のやりとり(turn-taking)に関する研究は、言語獲得との関連という視点から蓄積されてきている(例: Schaffer et al, 1977; Snow 1977, 1978; Bruner 1978; Ninio & Bruner 1978; Kaye 1977; Jaffe et al, 1973; Kaye & Wells 1980; Kaye 1982など)。また、初期の母子相互作用のあり方と数年後の子どもの母親への愛着(attachment)や言語・認知機能の発達との関連も追究されている(例: 三宅ほか1982; 齊

藤ほか1981; 古沢ほか1978, 1979; 高橋1981; 若葉1981; 大浜ほか1980, 1981など)。

しかし、このような従来からの母子関係重視の傾向に対し、近年、社会生活において子どもがかかわりをもつのは母親だけではないという視点が提起され、多様な対人的ネットワークに目を広げて研究をすすめていく必要(Lewis et al, 1975; Lewis & Feiring 1979)が強調されるようになってきた。これに伴い、母親との関係だけでなく、父親やきょうだい、祖父母、仲間などとの関係にも注目し、多面的に子どもの社会的相互作用の発達をとらえていこうとする動きが内外でみられるようになった。典型例として、きょうだい関係をとらえようとする研究(例: Vandell 1979; Kendrick & Dunn 1983; Dunn & Kendrick 1981)や、子どもが自分の周囲の人々を社会的ネットワークとして関連づけながら自己を形成していく過程を明らかにしようとする小島ほか(1982)の研究、親子関係と幼児の発達に関する三宅ほか(1981)の生態学的な研究をあげることができよう。

近年ではさらに、これらの多様な社会的システム間の相互関連的な発達過程が、実証的に検討されるようになってきている。乳児期においても、母子関係と他の社会的システムとの相互関係をはじめとして、子ども同士の仲間関係と他の社会的システムとの相互関係が、注目を集めている。

さて、このような新たな研究傾向は、子どもの社会的相互作用における発達の個人差が近年見直されるようになってきていることと関連するところが大きいと考えられる。なぜなら、ある社会的システム内でみられた発達の個人差を解釈し、その本質や起源を明らかにするためには、初期の段階からの他の社会的システムにおける個人差の有無およびその内容にも目を向け、それとの関連で検討をすすめていく必要が生じてくるからである。

従来は、個人間に発達の差異がみられても、その発達の意味が問われることはほとんどなく、主体となる側の

*東北大学大学院教育学研究科

**Bower(1977)も述べているように、厳密な意味での乳児期は普通、18か月間くらい(言語開始以前の段階)であろう。

要因の分析もきわめて不十分であった。

たとえば、以前の母子関係研究では、子どもがどんな子どもであるかによって母親の子どもに対する影響が違ってくる、という可能性は、ほとんど考慮されていなかったと言っても過言ではない。しかし近年、母子関係を考える上で、母親側の要因だけでなく、相互作用を構成しているもう一方の主体である子どもの側の要因も重要であり、この要因が母子相互作用において無視できない役割を演じる、ということが認識されるようになってきている (三宅 1984)。

仲間関係の研究でも、最近、個人差が発達の観点から問題にされるようになってきた。研究の進歩により、個人差がすでに乳児期にみられることが明らかになり、それらの個人差がどこに由来するのか、また発達のどんな意味をもつのか、という視点からとらえ直す方向で、多面的なアプローチが種々試みられつつある。

しかし、仲間関係の結び方の個人差に対しては、母子関係にみられる個人差に対するのとはまた違った角度からの切りこみが必要と考えられる。仲間関係の場合は、相互作用を構成する主体が生活年齢の似かよった同輩同士であるため、相互に与えあう影響の質が母子関係の場合とはかなり異なるであろう。このことをまず十分に認識しておく必要がある。また、個人差を生み出す主体側の要因の1つとして、多様な社会的システムにおける対人的経験の差異が、仲間関係の場合、母子関係以上に効いてくるものと思われる。したがって、仲間関係における個人差を追究する際には、とくにこの要因を問題にしていくことが大切になるのではあるまいか。

以上から、本稿では、発達研究の1つの焦点とも言うべき乳児期をとりあげ、そこでの社会的相互作用における発達の個人差の問題について、これまでの実証的な研究成果をふまえ、とくに仲間関係の発達の個人差を中心に研究の動向を考察する。具体的には、(1)近年の乳児の仲間関係研究における発達の個人差見直しの動きの内容を明らかにし、(2)乳児期の子ども同士の関係にみられる発達の個人差の具体的様相を示し、最後に(3)それらの個人差を究明するためにおこなわれているいくつかのアプローチについて検討を加え、(4)問題点と今後の研究課題を提起する。

Ⅱ. 乳児の仲間関係研究における

発達の個人差の見直し

近年、子ども-子ども関係の研究が増加し、「発達心理学のミクロコスモス」(古沢 1982)を形成せんばかりの進展をみせている。とくに、乳児同士の関係の発達を

明らかにしようとする研究は従来少なかったが、ここ数年着実にふえてきている。前述のように、この種の研究は、乳児期の対人関係研究が母子関係に偏寄りすぎたことへの反省から、社会的ネットワークの中で乳児の社会的相互作用の発達をとらえる必要性が提起されたのに伴って質的に高まり、他方、乳児保育の検討という社会的要請とのかかわりもあってすすめられてきたものとみることができよう。

これまでの諸研究の結果を総合すると、状況による拘束はうけるものの (Hay et al, 1983)、生後1年目の乳児でさえ、仲間に関心を示すことがかなり確かめられており (Vandell et al, 1981)、仲間同士で影響を及ぼしあい (Rubin & Ross 1982)、パターン化された短いものではあるがやりとりが可能である (Becker 1977; Vandell et al, 1980; Jacobson 1981) ことが知られるようになってきた。さらに生後2年目のよちよち歩きの乳児 (toddler) には、仲間同士で意味を分かち合い (shared meaning) ながらの (Bernner & Mueller 1982) 模倣的・相補的 (complementary)・相互的 (reciprocal) なゲームや社会的遊び (social play) もみられ (Eckerman & Whitley 1977; Ross & Kay 1980; Rubinstein & Howes 1976, 1979)、社会的な (social) skill* が存在する (Rubin & Ross 1982) ことが確かめられようとしている。

ところがその一方で、仲間関係が成立するのは2歳以降という、上記の結果とは相反するような報告がいくつかなされている。それによると、生後2年目までは乳児同士の持続的な接触はみられず (Bühler 1930)、相手に対して無関心なことが多く (横浜 1981)、相手からの働きかけを無視して、物に対するのと同様に反応し (Maudry & Nekula 1939)、生後2年目においても無意図的な接触が多く、18か月以降になってようやく仲間に対する正の反応がふえ、興味が物から人 (相手の子ども) へと移っていく (横浜1981) という。

このような相違は、実験の条件や状況、分析レベルの違い、あるいは研究者間の「仲間」や「仲間関係」のとらえ方自体の違い等からくるものかもしれない。しかし、たとえ子どもの年・月齢が同じでも、同じ状況・条件下でかなり異なる行動パターンが観察される場合も多いことから、対象児の側の要因も考えられる。

*Eckerman & Stein (1982) は、「是認された (approved) 方法で、種々の重要な社会的成果 (social outcome) を達成する能力」と定義し、社会的成果の1つとして、協同的遊び (cooperative play) をあげている。

近年の研究では、仲間との関係が個々の子どもの社会的発達に対し独自の貢献をすることが実証されてきている (Hartup 1983) が、仲間関係が個々の子どもの発達に及ぼす影響だけでなく、個々の子どもの要因が仲間関係の発達に及ぼす影響にも目を向けていこうとする動きもみられるようになってきた。このことは、個々の子どもの要因における差異を発達の個人差としてとらえ、それとかかわらせて仲間関係の結び方の個人差を見直し、その発達の意味を考えていこうとするものとみることができよう。

Ⅲ. 個人差の様相

他者との相互作用に必要な社会的な skill の 1 つに、自分自身の行動を相手の行動と協応的に意味づけ、関係づける skill がある。近年の研究では、この skill は生後 2 年目の間に発達する (Eckerman & Stein 1982) という結果が得られている。

ただし同報告の場合、よちよち歩きの子ども (toddler) が初対面の大人と遊ぶとき、このような skill を用いて一緒に大人と協応的な関係をつくり出せるわけではなかったと記されている。すなわち、16 か月という比較的早い時点で、すでに大人の模倣をするだけでなく、大人と相補的な関係を結ぶこともできる子どもが何人かいたことに示されるように、協応的關係のタイプの現われ方にはかなりの個人差がみられたのである。この場合、相手の大人が巧みに子どもの反応をひき出し発展させることのできるパートナーであったかどうか、ということも影響してくるであろうが、それを受ける子ども側の社会的な skill の質的レベルも無視できない。

同様のことは、子ども同士の間にもいえる。上記の Eckerman & Stein (1982) の報告では、初対面の toddler 間にも、さして頻繁ではないにせよ、協同的遊び (cooperative play) が生じたことが示されている。この場合も、各々の子どものなかに培われてきた社会的な skill の質的レベルが問題にされる必要があろう。

いずれにせよ以上の例は、かなりの社会的な skill をもつ toddler が存在することを示すもの (Eckerman & Stein 1982) かもしれない。

一方、toddler を対象にした研究で、仲間間での人気 (peer popularity) という視点から個人差を追究したものがいくつかある。Vandell (1978) は、toddler にも仲間間での好き嫌いが明らかにみられたとし、Lee (1973) も、仲間にも最も好まれる群と最も好まれない群では、相互作用の特徴に明白な相違があるとしている。たとえば、相互作用の開始は後者の方が多いが、その開始の仕

方は、他児をつかむなど、トラブルにつながりそうなのが多く、押しつけがましい。これに対し前者は、控えめに他児を見ることから相互作用を開始し、他児と相互的に反応しあうという特徴が得られた。

仲間関係における発達の個人差は、さらに遡って生後 1 年目でもみられることが報告されている。Vandell et al, (1980) は、初対面の乳児をペアにして生後 6, 9, 12 か月時点で観察し、次のような結果を得た。すなわち、この 6 か月間にわたり、相互作用の大半は短い 2 ユニットのやりとり (A 児が行動→B 児が行動) であったが、3 ユニットのやりとりが 25%、4 ユニット以上のやりとりも 15% みられた。また同じ 6 か月児同士でも、16 回も相互作用し、そのうち最も長いやりとりは 9 ユニットというペアもあれば、相互作用の全くないペアもあった。このように、同月齢でも、仲間と多くの相互作用系列をつくり出せる乳児とそうでない乳児とが存在する。また個人差は、孤立的 SDB* (isolated socially directed behavior) の頻度にもあらわれ、ある乳児は 0、ある乳児は 17 という結果であった。つまり、生後 1 年目の同月齢においても、仲間に向けた行動を繰り返す行方子どもがいる反面、ほとんど行わない子どももいるのである。

以上のように、すでにごく初期の発達段階でも、仲間とのかかわり方にかかなりの個人差がみられることが明らかにされてきている。

Ⅳ. 乳児の仲間関係における

発達の個人差へのアプローチ

では、前述のような発達の個人差は、なぜどのようにして生じてくるのだろうか。生後 1 年目にして、他児より多くの社会的な skill をもっているように見える子どもたちがなぜ存在するのかについては、未だ十分な説明はなされてはいない。また、これらの社会的なかわり方にみられる個人間の差異が、skill の差によるものなのかどうかも、明確にされてはいない。skill の差ではなく style の差ではないか (Pastor 1981) という見方もあるが、今後の検討課題といえよう。

いずれにせよ、このような社会的相互作用における発達初期の個人差を生み出す要因や起源の究明が、次の重要な課題となってくる。その際、前述のように、多様な社会的システムにおける対人的経験の差異が、近年注目

*こちらからの SDB (相手を見ることを伴う、相手に向けられた不連続の行動) (Mueller & Brenner 1977) に対し、相手から反応として、SDB も非社会的な ER (相手を見ることを伴わない行動) も返されない場合 (Vandell et al. 1980 ; 1981)。

されるようになってきている。

仲間関係研究でも、個々の子どもの社会的な先行経験が初期の仲間との相互作用に及ぼす効果が、問題にされている。そこで、社会的システムとして、母親・年長児（きょうだいを含む）・同輩との関係を取りあげ、各システムにおける個々の子どもの先行経験の差異との関連を、以下にみていくことにしよう。

1. 母親との経験における差異との関連

母親との社会的な先行経験における個人差との関連については、典型的なアプローチとして、発達初期に母子間で形成される愛着関係の質と、後の仲間集団内での社会的能力との相互関係を追究する方法がある。

母子愛着の質における個人差は、見知らぬ状況 (strange situation) で子どもが母親を安定基盤 (secure base) として用いる能力を観察することを通して評定される。従来は、母子愛着の質の個人差と、それに先行しかつ因果的とみなしうる諸変数 (母親の感受性や子どもの伝達様式など) との関係が、問題にされてきた。近年ではさらに、発達初期の愛着パターンが、後の toddler 期や就学前期における仲間との社会的相互作用能力の発達と関連づけて考えられ、縦断的アプローチが行われている。

Lieberman (1977) は、愛着と仲間との先行経験が3歳児の社会的能力に及ぼす影響を調べ、愛着の安定性 (security) が、仲間とかかわる能力を直接的にも間接的にも助長する可能性を示唆した。Easterbrooks & Lamb (1979) も、18か月時に securely attached と評定された子どもは、そうでない子どもより、仲間との相互作用が後に多くなるという結果を得ている。また、Arend et al, (1979) は、18か月時の愛着の質と、24か月時の課題解決能力、および4・5歳時の仲間との相互作用能力の間に相関を見出し、Waters et al, (1979) も、15か月時の愛着の安定性から、3歳半時の仲間との相互作用能力における個人差が予測できるとしている。

さらに、18か月時の母子愛着の質が20～24か月時の仲間とのペアでの遊び状況における社交性や社会的反応性とどのように関連するのかを調べた Pastor (1981) は、3つの愛着群間の量的・質的な類似点と相違点の分析を行っている。それによると、肯定的情動的定位 (positive affective orientation) に関しては、質的にはA群 (anxious avoidant infants) とC群 (anxious resistant infants) が類似しているが、量的頻度測度をとるとA群とB群 (securely attached infants) に類似性がみられ、C群よりも仲間に対する提示 (offer) 行動が多く、仲間からの提示を無視することも少なかった。またB群は、他の群より、母親に対しても仲間に対しても関心を示し、

肯定的な関係をつくり出そうとした。しかし、このようなB群児でも、ペアを組む相手の子どもによって大きく影響された。すなわち、B群児同士のペアでは相互模倣や協応が多かったのに対し、B群児がB群以外の子どもとペアを組むと、仲間との接触より自分の母親や仲間の母親との接触が多いという結果が得られた。これは、協応的にかかわろうとしても、仲間から拒否や無視を頻繁にうけるようなストレスの多い状況では、B群児は、母親の支えを必要としたことを示唆している。

これらの結果から Pastor (1981) は、仲間との遊び状況でみられた個人差と母子愛着の質の個人差との関連を指摘し、「仲間に対する社会的定位における差異は、より初期の母子愛着関係における差異を反映したものでらう」という仮説は支持されたとしている。

しかし、母子愛着の質が時間や状況、相互作用システムを越えて、子どもの後の行動発達に影響を及ぼし続ける、とはっきり結論づけることはまだできないであろう。先行諸研究が共通して仮定している「安定した愛着関係から他の領域における後の能力への繰越 (carry-over)」（Pastor 1981）の本質は、とくに母子システムと仲間システムとの間では未だ明確にされていない。この仮定自体の根拠および適切性についても、議論の余地が残されているといえよう。高橋 (1981) は、子どもの母親に対する愛着の安定性と母親以外の対象への愛着について、9か月児を60か月まで縦断的に検討し、大人への関心と仲間への関心は競合するという傾向を見出している。このことから、従来優勢であった対人関係の発達の一元過程モデル (牟田1983) ——母子相互の安定した愛着関係をもとに、他の人々との関係が築かれ広がっていく——とは異なる発達モデルの可能性も考えられる。

こうした愛着との関連という視点からの一連のアプローチに加えて、近年ふえてきているのは、母子相互作用と仲間間の相互作用の類似性と相互関係を、とくに skill の発達の面から明らかにしようとする研究である。

母子相互作用と仲間間の相互作用の関係については、次の3つの仮説が考えられている。第1の説は、両者は基本的に異なっており独立である (Lee 1975; Lewis et al, 1975; Rubinstein & Howes 1976) とするものである (非類似 [差異] 仮説)。これに対して、両者は基本的に類似している (Vandell 1977) とする説 (類似仮説) がある。さらに、母親との経験が後の仲間とかかわる能力を形成するとして、母子システムが仲間システムの先駆者 (Precursor) としての機能を果たすとみる (Eckerman et al, 1975) 説がある (先行仮説)。

Vandell (1980) は、これらの仮説の適否を調べるため、

6 か月児を12か月時まで縦断的に観察し、仲間に向けられた行動と母親に向けられた行動を比較検討した。その結果、月齢とともに仲間、母親の両方に対して発声したり見たりすることが多くなり、母親と仲間に対する微笑と発声に相関があったという点では、類似仮説が支持された。しかしその一方で、仲間と母親に向けられた行動のいくつか（例：nonsocial touch [見ないでさわる] など）に相違（頻度の差）がみられている。そして、観察実験室への来訪回数と性の影響が母親に対する行動にのみあったという点では、非類似仮説も支持されることが示された。Vandell (1980) はこれらの結果から、非類似・類似両仮説の諸要素を合併するような修正モデルの必要を示唆している。なお Vandell の同研究 (1980) では、交差時間差相関 (cross-lagged correlations) はなかったため、先行仮説は支持されなかった。

このように、母子相互作用と仲間間の相互作用は、類似性と機能的相違性に基づく複雑な関係にあることが示唆されてきている。Easterbrooks & Lamb (1979) や Vandell (1977) が述べているように、影響の方向は一方的ではなく相互的であり、仲間との相互作用が母子相互作用に影響し、またその逆の影響もあるかもしれない。この2つの社会的システムは、各々独自の質をもち (Vandell & Mueller 1980) 基本的には独立したものかもしれないが、両システムに共通する基本的な skill の存在も考えられる (Vandell & Wilson 1982)。しかしその場合、仲間関係における発達の個人差は、母子関係における発達の個人差とどのようにかわるのだろうか。この点を究明するためには、今後さらに年少の乳児から縦断的な観察を積み重ね、より広範で適切な測度を用いた詳細な分析・検討が必要であろう。また Vandell (1980) によって必要性が示唆された修正モデルについても、さらにその内容にまで分け入って追究されねばなるまい。

2. 年長児との経験における差異との関連

——きょうだい関係を中心に——

年長児は一般に年少児の相互作用を促すであろうと考えられている。Ross & Goldman (1977) の結果でも、18か月児の場合、相手が1歳児のときより年長（2歳）児のときの方が、はるかに複雑な相互作用を頻繁に行った。年長児は、一貫して相互作用の開始者となることが大人より少なく、年少児に対して大人ほど受容的でもない。そのため年少児は、年長児が相手のときは、大人が相手のときより能動的な役割をもたれることになるのかもしれない (Vandell & Mueller 1980)。他方、年長児は年少児仲間よりも反応しやすく、より多くの社会的な skill をもっていると考えられる。つまり年長児は、

年少児仲間と大人との中間的な立場にあり (Vandell & Mueller 1980)、中間的な役割を担いいる存在といえよう。

しかし、このような年長児との経験が、年少乳児同士の相互作用の skill に及ぼす影響に関しては、未だ有効な情報は得られていない (Vandell et al, 1981) ようである。乳児が年長児と社会的な先行経験をどの程度もったかを示す1つの有効な指標として、出生順位がとりあげられ、それと仲間に対する社会的行動との関係が示唆されてきているが、その関係も十分明らかにされてはいない。

Vandell et al, (1981) は、第1子乳児と就学前年齢（3～5歳）のきょうだいのある第2子乳児を、6か月と9か月の時点で観察し、乳児の仲間に対する関心と相互作用の仕方に、出生順位（年長児との経験差）との関連で差を見出した。それによると、第1子乳児は、第2子乳児より時間的にも頻度的にも多くの複雑な相互作用を行った。また就学前児との経験が少ない第1子乳児は、そうでない第1子乳児や第2子乳児より、相互作用の開始および協応的 (coordinated) SDB* が、9か月時点で有意に多かった。さらに相互作用の頻度は、就学前児との経験が少ない対 (dyad) で、9か月時に有意に多いという結果が得られた。

しかし、これらの結果だけから、年長児との経験が少ない乳児ほど仲間に対する関心が大きく skill も巧みであるとみなすことはできない。なぜなら、きょうだいの有意な効果はみられなかったという報告 (Bronson 1975; Goldman & Ross 1978) や、年長のきょうだいをもつ乳児の優位性を示唆する報告 (Shirley 1933) さえ一方においてあるからである。たとえ年長児との経験が仲間への提案 (overture) を抑制するように思われた (Vandell et al, 1981) としても、そのような抑制効果がなぜ生じるのかについては、まだ説明されていない。

以上のことから、今後は年長児との経験の量だけでなく質も問われる必要がある。年長児から無視されたり逆に支配されたりして、用心深く年長児に服従するような経験を多くもつ場合には、年長児との経験がかえって社会的発達の妨げになっているかもしれない。

しかし、Vandell et al, (1981) の結果は、第1子だけが被験児として用いられていた先行研究での発見の一般性に疑問を投げかけ (Hay et al, 1982)、年長児との経験の相違を個人差の重要な一要因として見直す必要を提起した、という意味では画期的であったといえよう。

*SDBのうち、2つ以上の同時的あるいは隣接する行動を含むもの（例：微笑しつつ発声する）(Vandell et al. 1981)。

乳児同士の相互作用の発達にとって、とくに年長のきょうだいとの経験が決定的である (Hay et al, 1982) のかどうかはまだわからないが、かなり重要な意味をもつことは確かなようである。

短期的にみれば、出生順位の相違による相互作用の頻度差には、ある安定性が示唆されている (Vandell et al, 1981) が、初期の年長児との経験や出生順位とその後の機能との相互関係を明らかにするためには、さらに縦断的な研究を積み重ねていく必要がある。

3. 同輩との経験における差異との関連

toddler の場合、同輩との経験は、より巧みな社会的な skill と関連している (Mueller & Brenner 1977; Vandell 1979) ともいえる。たとえば、仲間との遊び経験の多い toddler は、そうでない toddler よりも長い相互作用を行い、社会的行動の内容も複雑である (Mueller & Brenner 1977) という結果が得られている。

一方、Vandell et al, (1981) によると、年少乳児の場合、同一乳児群の 6 か月時と 9 か月時を比較したところ、乳児仲間との先行経験の効果は 6 か月時にはいくらかみられたが、9 か月時にはみられなかった。乳児仲間と頻繁に接する機会をもった 6 か月児は、出生順位を問わず、初対面の仲間と相互作用を開始することが、経験のより少ない 6 か月児より多く、それに成功する割合も高かった。この結果は、先にみた年長児との経験の効果とは対照的ともいえる結果である。年少乳児では、年長児から同輩へというより、同輩から他の同輩へ相互作用の skill を般化する方が容易なのかもしれない (Vandell et al, 1981)。

また Becker (1977) は、9 か月児を 2 群に分け、実験群のペアは 10 回の遊びセッションの後、統制群の対は 1 回目と 10 回目の遊びセッションでのみ出会うようにした後、それぞれ新しい仲間と組合わせて観察を行った。その結果、仲間に向けられた行動および相互作用は、実験群では頻度・複雑さともに増加したのに対し、統制群ではそのような変化はみられなかった。さらに、第 11 セッションで新しい仲間と出会った時、実験群では、最初の仲間との 10 回目のセッションより、仲間に向けられた行動の頻度は減少したが、1 回目のセッションよりは多かった。このことは、特定の同輩との経験が多い年少乳児は、そうでない年少乳児より、新しい仲間に対して大きな関心を示すことを示唆している。特定の同輩との反復的な経験は、仲間関係の必要条件といえるかもしれない (Becker 1977; Mueller & Brenner 1977)。

今日では、文化の違いを越えて多くの子どもたちが、生後 1 年目ですでに仲間と出会い、乳児同士日常的に接

触する機会がある (Hartup 1983) といわれる。逸話記録では、アメリカの 6～12 か月児のうち 20～40% が週に 1 度以上他の乳児と接触し、週 1 度接触をもつ乳児を含めると、その割合は 50% を越える。しかし、たとえばアメリカの 6 か月児の約 30% は、他の乳児と何ら接触をもっていない (Vandell & Mueller 1980) という。週 1 度以上同輩と接触する機会のある乳児についても、接触の具体的な内容までは明らかにされていない。しかし、このような特定の同輩との経験の内容における相違が、仲間との相互作用における個人差をつくり出す一因となっているのかもしれない。今後は、年長児の場合と同様に、どのような同輩とどんな経験をどれだけしたかを問題にして、縦断的かつ横断的にいっそう細かく検討していく必要がある。

V. 今後の課題

以上みてきたように、仲間関係研究における発達の個人差へのアプローチは、母親、きょうだい、きょうだい以外の年長児、同輩との各々の関係と関連づけて行われてきている。今後さらに、近年新たに注目され始めている父親や祖父母、家族以外のたとえば保育者等との関係も含めながら、多様な社会的ネットワークの中で仲間関係をとらえること、他の社会的システムとの相互連関的な発達機構を明らかにしていく中で、仲間関係の個人差の発生機構を究明していくことが望まれる。

しかし、乳児の仲間関係における発達の個人差を本質的にとらえるためには、単に乳児各々の多様な社会的システムにおける対人的な先行経験の量的・質的な差異を分析しただけでは不十分であろう。それに加えて、経験主体である乳児自身が、1 つ 1 つの経験に含まれる内容をどのように認知し、理解しているのか、という視点からのアプローチも必要なのではあるまいか。なぜなら、主体側の経験の受けとめ方によって、経験そのものもつ意味も個人によりかなり違ってくると思われるからである。

2 歳以下の子どもでも、相手によって行動を使い分けすることができる (山田 1982) など、乳幼児は、周囲のさまざまな人々とかかわる経験を重ねるなかで、それらの人々について、各々異なる認知的な枠組や構造をつくりあげていく。それらの対人認知の構造や枠組は、乳幼児自身がその人と他の人との関係をどう認知するか、という対人関係の認知の仕方に規定されることも多い。

その際に基盤となるであろう対人的経験の認知・理解の仕方には、乳児自身の社会的・認知的・情動的な発達のレベルが関係するとも考えられる。しかし、これらの

発達上の差が、乳児自身の対人的経験のとらえ方に具体的にどのように影響し、仲間との社会的相互作用の skill や style にそれらがどう反映していくのか、という点に関しては、未だ明らかにされていない。これらの過程や機構を究明することは、今後の重要な課題といえよう。

また、そもそも個人間にこのような社会的・認知的・情動的な発達の差異が生じるのはなぜか、という問題も、依然として残されたままである。これに関しては、「行動の個性」(庄司1984)やいわゆる「気質」(temperament)の差異の影響が、近年提起されている。しかし、たとえそれらが個人差を生み出す重要な要因たりうるとしても、環境や自分自身の経験の受けとめ方にそれらがどのように関与していくのかは不明である。また、生得的なものの影響は確かに大きいかもしれないが、それですべてが決まるというものでもない。したがって、仲間とのかかわり方の個人差の問題が、「気質」等の差異の問題に解消しきれるとはいいがたく、慎重に検討をすすめる必要がある。

ところで、以上のような多面的なアプローチがいつそう有効なものとなるためには、さらに次の点を十分考慮することが必要と思われる。それは、対人関係をうまく結べない子どもをどうとらえ、どのように発達援助していくか、という教育・臨床的な観点を検討・強化していくことである。

たとえば、乳児保育の実践場面では、乳児同士の間を保育者が仲立ちし、仲間関係の発達を援助しようとするはたらきかけが随時観察される(例：互いの行動に注目させる。互いの行動を意味づけ関連づける。いわゆる共感関係の成立を援助する。おもちゃのとりあいなど、日常生活の中で互いの要求がぶつかりあう場面をむしろ積極的に利用して、仲間とのかかわり方を指導していく。等)。つまりそこでは、各々の乳児の月齢や発達状況に応じた、いわば個人差を把握しながらのとりくみが日々なされ、また試みられているともいえよう。このような実際の保育場面で、教育的観点から、発達の個人差がどうとらえられ、どのようにとりくまれているのか、具体的に検討していくことにより、本稿のテーマの本質的解明の糸口がつかめるかもしれない。

また、臨床的観点から障害児を対象とした研究では、大井(1981)が、ことばのない自閉児の認知機能の障害と社会的相互作用の発達の障害との相互関係を検討し、荒木ほか(1981)でも、集団保育場面における精神遅滞児群と自閉児群の、大人および子どもとの対人関係を分析している。これらの研究は、障害をもたない乳児の社会的相互作用の発達機構、およびその発達途上における

つまずき(これが個人差につながるとも考えられる)の意味とそれらのつまずきの発生機構をも明らかにしていく上で、大いに意味があると思われる。

今後の研究方向として、以上のような教育・臨床的な観点からのアプローチの方向が、さらに追究される必要があろう。実験・観察的研究の成果とともに、現実におこなわれている乳児の保育の内容とかかわった実践的示唆に富む研究や、発達障害の現場、臨床からの実証的研究の成果が、従来にも増して期待される。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., & Wittig, B. A. 1969 Attachment and exploration of one-year-olds in a strange situation. In B. M. Foss (Ed.), *Determinants of infant behavior*: N. London: Methuen.
- Ainsworth, M. D. S., Bell, S. M., & Stayton, D. J. 1971 Individual differences in strange situation behavior of one-year-olds. In H. R. Schaffer (Ed.), *The origins of human social relations*. New York: Academic Press.
- 荒木穂積・目片和子・千草篤磨、伊東由利子・金井斐侶子 1981 障害幼児の発達と保育(1), (2) 日本保育学会第34回大会論文集, 292-295.
- Arend, R., Grove, F., & Sroufe, A. 1979 Continuity of individual adaptation from infancy to kindergarten: A predictive study of ego resiliency and curiosity in preschoolers. *Child Development*, 50, 950-959.
- Becker, J. M. T. 1977 A learning analysis of the development of peer-oriented behavior in nine-month-old infants. *Developmental Psychology*, vol. 13, No. 5, 481-491.
- Bell, S. M., & Ainsworth, M. D. S. 1972 Infant crying and maternal responsiveness. *Child Development*, 43, 1171-1190.
- Bower, T. G. R. 1977 A primer of infant development. W. H. Freeman and Company. 岡本夏木・野村庄吾・岩田純一・伊藤典子共訳 1980 乳児期——可能性を生きる—— ミネルヴァ書房
- Brenner, J., & Mueller, E. 1982 shared meaning in boy toddlers' peer relation. *Child Development*, 53, 380-391.
- Bronson, W. 1975 Peer-peer interactions in the second year of life. In M. Lewis & L. A. Rosenblum (Eds.), *The origins of behavior: Friendship*

- and peer relations. New York : Wiley.
- Bronson, W. C. 1981 Todders' behaviors with age-mates : Issues of interaction, cognition, and affect. Norwood, N. J. : Ablex.
- Bruner, J. S. 1976 From communication to language : A psychological perspective. *Cognition*, 3, 255-287.
- Bruner, J. S. 1978 Learning how to do things with words. In J. S. Bruner & Garton (Eds.), Human growth and development. Clarendon press. 寺田晃監訳 1980 子どもの成長と発達・新曜社
- Bühler, C. 1930 The first year of life. Rahway, N. J. : John Day.
- Clarke-Stewart, K. A., Umeh, B. J., Snow, M. E., & Pederson, J. A. 1980 Development and prediction of children's sociability from 1 to 2 1/2 years. *Developmental Psychology*, vol. 16, No. 4, 290-302.
- Dunn, J., & Kendrick, C. 1981 Social behavior of young siblings in the family context: Differences between same-sex and different-sex dyads. *Child Development*, 52, 49-56.
- Easterbrooks, M. A. & Lamb, M. 1979 The relationship between quality of infant-mother attachment and infant competence in initial encounters with peers. *Child Development*, 50, 380-387.
- Eckerman, C. O., Whatley, J. L. & Kutz, S. L. 1975 Growth of social play with peers during the second year of life. *Developmental psychology*, 11, 42-49.
- Eckerman, C. O., & Whatley, J. L. 1977 Toys and social interaction between infant peers. *Child Development*, Vol. No. 4, 1645-1656.
- Eckerman, C. O. & Stein. 1982 The toddler's emerging interactive skills. In K. H. Rubin & H. S. Ross (Eds.), Peer relationships and social skills in childhood. Springer-Verlag New York.
- 江口純代 1978 保育園1歳児における子ども間の相互交渉について——異年齢グループでのあそび場面の分析—— 日本教育心理学会 第20回総会論文集, 60-61.
- 江口純代 1979(a) 乳幼児期初期における子ども同士の交渉(その1)——0才から3才までの子どもたちによる遊び場面における1歳児の場合—— 北海道教育大学紀要(第1部c) 29, 161-174.
- 江口純代 1979(b) 乳幼児期初期における子ども同士の交渉(その2)——0才から3才までの子どもたちによる遊び場面における2歳児の場合—— 人文論究(北海道教育大学函館人文学会), 39, 57-68.
- 江口純代 1980 乳幼児期初期における子ども同士の交渉(その3)——同年齢児による遊び場面における2才児の場合—— 北海道教育大学紀要(第1部c), 30, 395-411.
- 藤崎真知代・古沢頼雄・斉藤晃 1982 生後3年間における母子相互交渉 日本教育心理学会第24回総会論文集, 106-107.
- Goldman, B. D. & Ross, H. S. 1978 Social skills in action : An analysis of early peer games. In J. Glick & K. A. Clarke-Stewart. (Eds.), Studies in social and cognitive development. vol. 1 : The development of social understanding. New York : Gardner Press.
- Hartup, W. W. 1983 Peer relations. In P. H. Mussen (Ed.), Handbook of child psychology. vol. 4, Socialization, personality, and social development. New York : Wiley. 103-196.
- Hay, D. F., & Ross, H. S. 1982 The social nature of early conflict. *Child Development*, 53, 105-113.
- Hay, D. F., Pedersen, J., & Nash, A. 1982 Dyadic interaction in the first year of life. In K. H. Rubin & H. S. Ross. (Eds.) Peer relationships and social skills in childhood. Springer-Verlag. New York. 11-39.
- Hay, D. F., Nash, A., & Pedersen, J. 1983 Interaction between six-month-old peers. *Child Development*, 54, 557-562.
- 櫃田紋子・伊志嶺美津子・大野愛子・三保美代子 1981 乳幼児の社会性の発達に関する縦断的研究2——保育園0才児における社会的行動—— 日本教育心理学会第23回総会論文集, 72-73.
- 櫃田紋子・大野愛子・三保美代子・伊志嶺美津子 1982 乳幼児の社会性の発達に関する研究——乳児間の社会的行動—— 日本教育心理学会第24回総会論文集, 330-331.
- Holmberg, M. C. 1980 The development of social interchange patterns from 12 to 42 months. *Child Development*, 51, 448-456.
- 本郷一夫・布施佐代子・鈴木牧夫 1982 乳児の社会的相互作用の発達(4) 日本教育心理学会第24回総会論文集, 336-337.

- 伊志嶺美津子・櫃田紋子・三保美代子・菊池敦代 1982 1才児における対人関係の発達について——1. 設定グループ場面からの検討—— 日本保育学会第35回大会論文集, 118-119.
- Jacobs, B. S. & Moss, H. A., 1976 Birth order and sex of sibling as determinants of mother-infant interaction. *Child Development*, 47, 315-322.
- Jacobson, J. L. 1981 The role of inanimate objects in early peer interaction. *Child Development*, 52, 618-626.
- Jaffe, J., Stern, D. N. & Peery, J. C. 1973 Conversational coupling of gaze behavior in prelinguistic human development. *Journal of psycholinguistic research*, vol. 2, No. 4, 321-329.
- 金谷有子・川上清文・須田治・高井清子 1982 乳児の社会的インタラクションの発達の研究(1)(2)(3), 日本教育心理学会第24回総会論文集, 322-329.
- 金田利子 1973 乳幼児保育論——乳幼児期における発達と教育—— 有斐閣双書
- 川井尚・恒次欽也・松井園子・金子保・大藪泰 1980 乳児-乳児関係の発達(1)・(2) 日本心理学会第44回大会論文集, 462-463.
- 川井尚・恒次欽也・白川園子・金子保・大藪泰 1981 乳児-乳児関係の発達(3) 日本心理学会第45回大会論文集, 491.
- 川井尚・恒次欽也・金子保・白川園子・大藪泰 1982 乳児-乳児関係の発達(5) 日本心理学会第46回大会論文集, 258.
- 川上清文・須田治 1979 乳児の社会的インタラクションの発達の研究 1) 日本教育心理学会第21回総会論文集, 286-287.
- 川上清文・金谷有子・須田治・高井清子 1980 乳児の社会的インタラクションの発達の研究(3)(4)(5) 日本教育心理学会第22回総会論文集, 316-321.
- 川上清文・金谷有子・須田治・高井清子 1981 乳児の社会的インタラクションの発達の研究(7)(8)(9) 日本教育心理学会第23回総会論文集, 292-297.
- Kaye, K. 1977 Toward the origin of dialogue. In Schaffer, H. R. (Ed.) *Studies in mother-infant interaction*. Academic Press.
- Kaye, K., & Wells, A. J. 1980 Mothers' jiggling and the burst-pause pattern in neonatal feeding. *Infant behavior and development*, 3, 29-46.
- Kaye, K. 1982 The mental and social life of babies——How parents create persons—— The University of Chicago Press.
- Kendrick, C. & Dunn, J. 1983 Sibling quarrels and maternal responses. *Developmental Psychology*, vol. 19, No. 1., 62-70.
- 小嶋秀夫・山田洋子・村上京子・河合優年 1982 乳幼児の「きょうだい-母関係」に対する認知と行動(1)(2)(3) 日本教育心理学会第24回総会論文集, 288-293.
- 小島広光・今野和夫・辻野直子・神田英雄 1977 集団保育場面をととしての乳児の発達に関する研究(1)(2)(3) 日本教育心理学会第19回総会論文集, 76-81.
- 古沢頼雄・高橋道子・福本俊・石井富美子・藤崎真知代・天岩静子・藤田芳正 1978 発達初期における母子交互性に関する研究 VII-1~3, VIII, N, 日本教育心理学会第20回総会論文集, 40-49.
- 古沢頼雄・高橋道子・福本俊・天岩静子・石井富美子・藤崎真知代・藤田芳正 1979 発達初期における母子交互性に関する研究(10)~(14) 日本教育心理学会第21回総会論文集, 314-323.
- 古沢頼雄 1982 部門別論評 発達(乳幼児研究) 教育心理学年報 第21集, p. 88.
- Lee, L. C. 1973 Social encounters of infants: The beginning of popularity. Paper presented at the international society for behavioral development, Ann Arbor, August.
- Lee, L. C. 1975 Toward a cognitive theory of interpersonal development: Importance of peers. In M. Lewis & L. A. Rosenblum (Eds.), *Friendship and peer relations*. New York: Wiley.
- Lewis, M., & Brooks, J. 1975 Infants' social perception: A constructivist view, In L. Cohen & P. Salapatek (Eds.) *Infant perception: From sensation to cognition*. (vol. 2.) New York: Academic Press.
- Lewis, M., Young, G., Brooks, J., & Michalson, L. 1975 The beginning of friendship. In M. Lewis & L. A. Rosenblum (Eds.), *Friendship and peer relations*. New York: Wiley.
- Lewis, M. & Feiring, C. 1979 The children's social network: social object, social functions, and their relationship. In M. Lewis, & L. A. Rosenblum. (Eds.), *The child and it's family*. Plenum.
- Lieberman, A. F. 1977 Preschoolers' competence with a peer: Relations with attachment and peer experience. *Child Development*, 48, 1277-1287.

- Maudry, M., & Nekula, M. 1939 Social relations between children of the same age during the first two years of life. *Journal of Genetic Psychology*, 54, 193-215.
- 三宅篤子・牟田悦子 1978 保育園児の相互交渉の発達過程——相補的役割を理解した相互交渉ができるまで—— 日本教育心理学会第20回総会論文集, 58-59.
- 三宅篤子・牟田悦子 1979 保育園児の相互交渉の発達過程——1才～6才における発達形態—— 日本教育心理学会第21回総会論文集, 114-115.
- 三宅篤子 1983 保育園児の相互交渉の発達過程(その2) ケースを通しての social skill の分析 日本教育心理学会第25回総会論文集, 354-355.
- 三宅和夫・田島信元・関道子・臼井博・佐藤公治 1980 親子関係と幼児の発達に関する生態学的研究Ⅲ, その1～その4 日本心理学会第44回大会論文集, 476-479.
- 三宅和夫・田島信元・関道子・氏家達夫・小島康次・中野茂・臼井博・佐藤公治 1981 親子関係と幼児の発達に関する生態学的研究Ⅳ, その1 日本心理学会第45回大会論文集, 447.
- 三宅和夫・東洋・柏木恵子 1982 発達初期における子どもの社会化の日米比較研究(その1)——生後20か月までのデータ分析の視点—— 日本教育心理学会第24回総会論文集, 200-201.
- 三宅和夫 1984 発達心理学的にみた母子相互作用 別冊 発達, 173-180. ミネルヴァ書房
- Mueller, E. & Brenner, J. 1977 The origins of social skills and interaction among playgroup toddlers. *Child Development*, 48, 854-861.
- 牟田悦子・三宅篤子 1983 保育園児の相互交渉の発達過程(その1)——1～2才児における対代的なパターンの交渉のタイプと交渉における意図の理解について—— 日本教育心理学会第25回総会論文集, 352-353.
- 牟田悦子 1983 対人関係の発達 磯貝芳郎ほか編 児童心理学の進歩, vol. 22, 金子書房
- Ninio, A., & Bruner, J. S. 1978 The achievement and antecedents of labelling. *Journal of Child Language*, 5, 1-15.
- 大浜幾久子・辰野俊子・斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子 1981 母子相互作用における指さし行動の発達——時間標本資料の分析—— 教育心理学研究, 29, 3, 272-278.
- 大井学 1981 話しことばをもたない自閉症児のコミュニケーション——言語・認知, 社会的相互作用の発達論—— 愛媛大学教育学部紀要, 第1部, 27, 85-98.
- 大野愛子・櫃田紋子・伊志嶺美津子・三保美代子 1980 乳幼児の社会性の発達に関する縦断的研究——1. 0才児における社会的行動—— 日本教育心理学会第22回総会論文集, 402-403.
- Pastor, D. L. 1981 The quality of mother-infant attachment and its relationship to toddlers' initial sociability with peers. *Developmental psychology* Vol. 17, No. 3, 326-335.
- Ross, H. S. & Goldman, B. D. 1977 Infants, sociability toward strangers. *Child Development*, 48, 638-642.
- Ross, H. S. & Kay, D. A. 1980 The origins of social games. In K. H. Rubin (Ed.), *Children's play: New directions for child development*, vol. 9. San Francisco: Jossey-Bass.
- Ross, H. S. 1982 Establishment of social games among toddlers. *Developmental Psychology*, 18, 509-518.
- Ross, H. S., Lollis, S. P., & Elliott, C. 1982 Toddler-peer communication. In K. H. Rubin & H. S. Ross (Eds.), *Peer relationships and social skills in childhood*. New York: Springer-Verlag.
- Rubin, K. H. & Ross, H. S. 1982 (Eds.), *Peer relationships and social skills in childhood*. New York: Springer-Verlag.
- Rubin, K. H. 1983 Symposium: Social competence and peer status—Recent perspectives on social competence and peer status: some introductory remarks. *Child Development*, vol. 54, No. 6, 1383-1385.
- Rubinstein, J. L. & Howes, C. 1976 The effects of peers on toddler interaction with mother and toys. *Child Development*, 47, 597-605.
- Rubinstein, J. L. & Howes, C. 1979 Caregiving and infant behavior in day care and in homes. *Developmental Psychology*, vol. 15, No. 1, 1-24.
- 斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子・辰野俊子 1981 生後2年間の伝達行動の発達——母子相互作用における発声行動の分析—— 教育心理学研究, 29, 1, 20-29.
- Schaffer, H. R., Gollis, G. M., & Parsons, G. 1977

- Vocal Interchange and visual regard in verbal and pre-verbal children. In H. R. Schaffer (Ed.), *Studies in mother-infant interaction*. Academic Press.
- Shirley, M. 1933 *The first two years: A study of twenty-five babies*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- 庄司順一 1984 乳児の気質 別冊発達 57-64, ミネルヴァ書房
- Snow, C. E. 1977 The development of conversation between mothers and babies. *Journal Child Language*, 4, 1-22.
- Snow, C. E. 1978 The conversational context of language acquisition. In R. N. Campbell & P. T. Smith (Eds.), *Recent advances in the psychology of language*. Plenum Press.
- Stern, D. 1977 *The first relationship: Infant and mother*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- 鈴木牧夫 1980 集団保育場面をととしての乳児の対人関係の発達——事物を媒介した場面を中心にして—— 日本教育心理学会第22回総会論文集, 406-407.
- 鈴木牧夫・布施佐代子・本郷一夫 1981 乳児の社会的相互作用の発達(1), (2), (3) 日本教育心理学会第23回総会論文集, 282-287.
- 高橋恵子 1981 9か月から60か月にいたる母親への愛着の発達 日本心理学会第45回大会論文集, 446.
- 辰野俊子・斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子 1980 言語行動の発達(Ⅱ) 玩具を媒介とした母子相互作用 東京大学教育学部紀要, 第19巻, 35-74.
- 辰野俊子・斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子 1981. 言語行動の発達(Ⅲ) 絵本場面の母子相互作用における指さし行動(13から30か月児の縦断観察資料の分析) 東京大学教育学部紀要, 21, 77-88.
- 寺田晃 1983 部門別論評 発達(乳・幼児研究) 教育心理学年報第22集, p. 72.
- Vandell, D. L. 1977 *Boy toddlers, social interaction with mothers, fathers, and peers*. (Doctoral dissertation, Boston University, 1977) *Dissertation abstracts international*, 37, 6309B-6310B. (University Microfilms No. 77-11, 428)
- Vandell, D. L. 1978 *Friendship and popularity during the second year of life*. Paper submitted for publication, University of Texas at Dallas.
- Vandell, D. L. 1979 A microanalysis of toddlers, social interaction with mothers and fathers. *Journal of Genetic Psychology*, 134, 299-312.
- Vandell, D. L. 1980 Sociability with peer and mother during the first year. *Developmental Psychology*, vol, 16, No. 4. 355-361.
- Vandell, D. L., Wilson, K. S., & Buchanan, N. R. 1980 Peer interaction in the first year of life: An examination of its structure, context, and sensitivity to toys. *Child Development*, 51, 481-488.
- Vandell, D. L. & Mueller, E. C. 1980 Peer play and friendships during the first two years. In H. C. Foot, A. J. Chapman, & J. R. Smith (Eds.) *Friendship and social relations in children*. London: Wiley.
- Vandell, D. L., Wilson, K. S., & Whalen, W. T. 1981 Birth-order and social-experience differences in infant-peer interaction. *Developmental Psychology*, vol, 17, No. 4, 438-445.
- Vandell, D. L. & Wilson, K. S. 1982 Social interaction in the first year: Infants' social skills with peers versus mother. In K. H. Rubin & H. S. Ross (Eds.), *Peer relationships and social skills in childhood*. New York: Springer-Verlag.
- 若葉陽子 1981 指さし行動の発達に関する研究——3ヶ月～24ヶ月期の母子場面における観察—— 日本教育心理学会第23回総会論文集, 290-291.
- Waters, E., Wippman, J. & Sroufe, L. A. 1979 Attachment, positive affect, and competence in the peer group: Two studies in construct validation. *Child Development*, 50, 821-829.
- 山田洋子 1982 0～2歳における要求-拒否と自己の発達 教育心理学研究, 30, 2
- 横浜恵三子 1981 乳幼児期における Peer-Relation の発達の研究 教育心理学研究, 29, 2, 175-179.
- <付記>
本論文の作成にあたりご指導くださいました東北大学教育学部寺田晃教授に厚く感謝いたします。
(1984年7月2日受稿)